

〈総合的な学習の時間部会〉

I 研究主題

「個に応じた生きる力の素地をはぐくむ指導と評価に関する研究」

II 研究の概要

生きる力の素地をはぐくむために欠かすことのできない観点を、これまでの学習活動の中から具体的に洗い出し、限定した。また、学習活動に即した具体的な評価規準を設定し、生徒への支援の手立てを工夫した。特に、「総合的な学習の時間」では、生徒の変容を的確にとらえることが大切であると考え、個に応じたきめ細かな指導のための効果的な資料の活用について研究した。

III 研究の内容

新学習指導要領に基づく教育課程の実施も2年目を迎え、各学校の「総合的な学習の時間」の実践は、生徒の実態や地域の特性を踏まえながら、育てたいと願う生徒像の実現を目指し、3年間の系統性を考慮して特色のある学習活動を展開しつつある。すなわち、多くの学校では、どのような方向を目指して、どのような学習内容を用意すべきかという段階は、一応定着したと考えられる。今後「総合的な学習の時間」が、生徒一人一人を成長させ得るかどうかは、評価活動をどのように進めるかにかかっている。そのためには、ねらいに即して、育てようとする力についての明確な評価規準の設定が必要であり、「生き方」など目に見えにくいものを評価する具体的な方策を持たなければならない。学習の過程における個々の生徒の変容を、何によってどのように把握し、評価に結びつけるのかは重要である。この点において、各学校では、まず実践を軌道に乗せることが先決であった感があり、一連の評価活動の研究実践は十分とはいえないと受け止めている。

一方で、中央教育審議会「初等中等教育における当面の教育課題及び指導の充実・改善方針について」（答申）によれば、「総合的な学習の時間」は学びへの動機付けを図るとともに、各教科等で学んだ知識や技能を実生活に応用する力、思考力、判断力、表現力や学ぶ意欲を高めるなど一層の充実が求められているところである。

また、平成14年度の本研究開発委員会では、研究主題を「総合的な学習の時間のねらいの達成を目指す指導内容・評価の工夫」と設定し、そのねらいの一つである「自己の生き方を考えることができるようにする」を重視して研究に取り組んでいるが、今後の課題として評価の工夫の必要性を掲げている。

以上のことがらを総合的にとらえて、本年度は、生きる力の育成や生き方を重視した学習目標に照らした観点を設定し、福祉ボランティア体験「老人ホームへの訪問」という具体的な研究例題を基に、評価規準・評価方法の在り方について研究することにした。特に、生徒の学習活動に即した具体的な評価規準や授業における支援の手立て等を工夫し、その有効性を授業の中で検証することとした。

評価への考察

(1) 評価の観点

本研究では、文部科学省が示した「総合的な学習の時間」のねらいに沿った5つの観点、「①課題設定の能力」「②問題解決の能力」「③学び方やものの考え方」「④学習への主体的・創造的な態度」「⑤自己の生き方」に着目し、評価の観点を「A課題設定能力」「B課題解決能力」「C自己表現能力」「D自己の生き方の探求」の4点とした。文部科学省のあげる「③学び方やものの考え方」と「④学習への主体的・創造的な態度」については、本研究ではそれぞれの観点に関わってくるものと考えた。その上で、学習した内容や主体的な活動を表現する能力は、「生きる力の素地をはぐくむ」観点として重要であると考え、「C自己表現能力」としてまとめた。こうして評価の観点を「生きる力の素地をはぐくむ」視点に立って4つにとらえ直すことで評価をわかりやすくした。この4観点で評価する方法として様々な評価資料を作成し、学習活動のそれぞれの場面で評価していけるようにした。

A 課題設定能力

情報整理カード・討論記録・課題設定記入用紙・自己評価カード

課題を明確にするための資料を作成する。的確な学習活動を行うため、生徒同士の討論を深めていき、各自のテーマを明確にし設定できることを評価する。

B 課題解決能力

アポイントカード・相談班カード・情報整理カード・事前相談用紙・班仕事分担カード・役割個人カード・自己評価カード

事前学習で取り組むべき内容など、計画に沿って課題が解決できることを評価する。

C 自己表現能力

体験日誌・訪問先の評価・体験レポート・自己評価カード

自己の課題に沿って取り組んだ内容について表現できることを評価する。

D 自己の生き方の探求

体験レポート・他者評価カード・作文・自己評価カード

自己や他者評価により、学習を振り返り、新たな課題を主体的に探求できることを評価する。

(2) 評価規準

福祉ボランティア体験「老人ホームへの訪問」を研究例題に、どのように評価すると一人一人の生徒の資質や能力を高めていけるのかを考察した。まず、予想される生徒の活動を、計画の活動項目ごとに分けて、評価規準を作成した。評価規準は、生徒の活動がより主体的に、活性化していけるように具体的に明示した。例えば、老人ホームに電話をかけアポイントをとる学習活動での評価規準は、「相手の立場を考え、必要な事柄を踏まえたやりとりができたか」である。評価規準が明らかであれば、相手の立場を考えるにはどういうことが大切なのか、やりとりをするときにどういうことに配慮すればよいかなど、主体的に生徒が工夫するようになり、工夫したことを実際の場面で有効に生かしていくことができる。

(3) 「認め」と「支援」の手立て

評価規準が明確であれば、教師は学習活動のあらゆる場面において、何をどう支援するこ

とが必要なかが明らかになる。生徒一人一人の成長を認め、更に取り組みの不十分なところを支援していくことができる。また、授業の中で生徒の実態を的確にとらえ、適宜授業計画や内容の修正を図ることができる。

研究例題 福祉ボランティア体験 「老人ホームへの訪問」

時間	予想される 学習活動	評価の 観点	生徒の学習活動に即した 具体的な評価規準	認めと支援の手立て	評価方法
1	老人ホームとは何か。	④ A ③ A	・積極的・主体的に情報収集を行っているか。 ・インターネット・公的機関・書籍などを活用しようとしているか。	・学習活動のやり方がよくわからない小グループに適宜アドバイスを与える。 ・インターネットの利用の仕方や、情報の整理法などを適宜アドバイスする。	自己評価カード 情報整理カード 授業観察
2	訪問の目的やテーマについて話し合う。	① A	・話し合いを通して目的を理解し、自分なりのテーマを設定することができたか。	・テーマ設定が困難な生徒には適宜個別指導を行う。	討論記録 課題設定記入用紙 自己評価カード 授業観察
3	老人ホームに電話で趣旨を説明し、アポイントをとる。	② B ③ C	・相手の立場を考え必要な事柄を踏まえたやりとりができたか。 ・聞き手にわかるように、訪問の趣旨を的確に伝えられたか。	・アポイントカードをチェックし、不足点について助言する。 ・人と接するときの基本的なマナーを指導しておく。	アポイントカード 相談班カード 自己評価カード 授業観察
4	事前学習（老人ホームの1日、職員の仕事などを調べる）	② B ③ ② B	・必要な事項を収集し、整理・活用することができたか。 ・訪問に向けての手順・計画を立てることができたか。	・情報整理カードをチェックし、必要に応じて助言する。	情報整理カード 自己評価カード 授業観察
5	体験に向けての事前相談	② B	・受け入れ先の意向や配慮事項を理解することができたか。	・事前相談用紙をチェックし、不明瞭な点を助言する。	事前相談用紙 情報整理カード 自己評価カード 授業観察
6	体験に向けての事前準備	① A ④ B ② B	・体験できる内容・方法について相談し決定できたか。 ・自ら進んで話し合おうとしているか。 ・自分の課題にあった役割分担ができたか。	・話し合いを観察し、具体的な話し合いが進まない班には助言をする。	討論記録 班仕事分担カード 役割個人カード 自己評価カード 授業観察
7	体験学習	③ B ④ C ② B	・マナーを守って行動できたか。 ・積極的に行動し、交流できたか。 ・予想外の出来事にもその場に応じた行動ができたか。	・事前に基本的なマナーや接し方を指導しておく。	体験日誌 自己評価カード
8	まとめ	③ C ⑤ D	・体験を自分なりにまとめられたか。 ・今後の課題や友達に呼びかけたいことなどを盛り込めたか。	・事前学習でわかった内容や体験で学んだことなどを自分なりの言葉でまとめるように助言する。	体験レポート 自己評価カード 授業観察
9	発表	③ C ④ C	・効果的な発表になるための工夫がなされているか。 ・表現豊かな発表ができたか。	・発表の基本的な形を指導する。 ・話し方を指導したり、発表原稿をチェックしたりする。	他者評価カード 自己評価カード 授業観察
10	全体のまとめ	⑤ C D	・学習全体を通して成長が感じられたか。	・学んだことや学習を通して成長したことを質問形式で確認させる。	作文 体験レポート

【観点の記号についての説明】 数字は（文部科学省の観点）、アルファベットは（東京の教育21部会の観点）

IV 指導事例

検証授業 1

研究例題「福祉ボランティア体験（老人ホームへの訪問）」における「4 事前学習」を、「上級学校を知ろう」の中で検証する。

(1) 指導案

ア 学年のテーマ 「上級学校を知ろう」

イ 学習内容とねらい

- ① 学校案内を基に上級学校調べを行い、様々な上級学校の内容を理解し、上級学校への興味・関心を高める。
- ② 上級学校に1日体験入学し、上級学校への理解を深めるとともに、上級学校の生徒との異年齢交流を行う中でコミュニケーション能力を高める。
- ③ 調べ学習後の中間発表や体験後のプレゼンテーションを行い、発表能力を高めるとともに、各自の理解を学年全員で共有し合い、今後の自己の生き方に生かす。

ウ 検証授業のねらい

本時の検証授業では、体験学習前の事前学習において、評価の観点「B課題解決能力」について具体的な評価規準を定め、支援の仕方や評価方法を検証する。「総合的な学習の時間」の評価は、1時間ごとの授業の中だけでとらえるのではなく、生徒の活動の積み重ねや変化を形成的に評価していくことが大切である。そこで、具体的な評価規準を定め、授業観察とともに生徒の学習活動がわかる情報整理カードや発表作品を点検し、生徒自身による自己評価カードを有効に活用して「認め」と「支援」を行い、生徒一人一人が伸ばした能力を評価する手立てを考える。

エ 本時の授業

授業クラス 2年1組（男子19名、女子20名）

授業内容 上級学校体験に向けての事前学習（3時間目）

◇ 班ごとに各種上級学校を分担し、特色や内容をまとめ、中間発表の準備を行う。

〈分担〉①全日制普通科、②コース制、③定時制、④工業科、⑤商業科、

⑥農業科、水産科、家庭科

流れ	生徒の学習活動	評価の観点	生徒の学習活動に即した具体的な評価規準	認めと支援の手立て	評価方法
導入	・ 本日の活動を班で確認する。			・ 前回のまとめを点検して、不明瞭な点や不足していることなどを指摘し、本時でやるべきことを明らかにする。	
展開	・ 前回分担した自分の項目について、まとめの続きを行う。 ・ 自分の発表内容を清	② ③ B	・ 本時の自己の課題が明確になっているか。 ・ まとめに必要な事項を資料から見つけ、整理・活	・ 生徒の様子を観察し、適宜声をかけて相談にのる。 ・ 効果的な発表ができるようなまとめ方や資料の提示などを	・ 情報整理カード ・ 発表のための話し合い ・ 発表作品

開	書する。 ・必要な資料やグラフを作成する。	④	用をすることができているか。 ・効果的な発表になるよう、工夫しているか。	助言する。	自己評価カード ・授業観察
まとめ	・自己評価カードに記入する。 ・次回の授業の確認をする。			・自分の気づいたことや感じたことを自分なりの言葉で記録するよう助言する。	

※評価の観点②・③・④は、文部科学省の示した観点である。

(2) 検証授業1を終えて

本校は「総合的な学習の時間」がまだ十分に定着していないため、生徒たちにとっては、この「上級学校を知ろう」という学習が初めての本格的な時間であった。そのため、初期の段階では、自分で目標を定め、調べ学習をすることになじめない生徒がかなり見受けられた。そこで、**自己評価カード**の「先生より」の欄に、「その時間に、生徒がやれていたこと」を記入して生徒の活動を認めるとともに、「次回は何をしたらよいのか」をアドバイスすることにした。記入に当たっては、①授業中の生徒の活動を観察し、適宜支援を行い、その後の生徒の変容をとらえる。②**情報整理カード**や発表作品の下書きなどを毎時間点検し、「授業中の支援を生かしているか」、「的確な情報を収集し、まとめているか」などを確認する。そして、**自己評価カード**の記入内容と①や②をもとに、「認め」と「支援」を記入することにした。

その結果、自分の学習する目標を徐々に理解し始め、中間発表に向けて、クラス全員が班の中で自分の分担の調べ学習を行うことができるようになった。また、意欲・関心の高い生徒にとっては**自己評価カード**への記入が、更に何をすべきか自分で考える手立てになっている。自己評価の「A・B・C」についても、しっかり学習に取り組みはじめると、何もやっていなかったときには平気で「A」をつけていた生徒が、自分の学習状況を考えて自己評価をつけるように変わってきた。そして、今日はよくやっていると感じるときに、生徒自身も素直に「A」の評価を自分に下す自信も出てきた。

検証授業を通して、上記の指導案に示した具体的な評価規準を基に、評価方法を有効に活用することで、①一人一人の生徒への「認め」と「支援」を行うことができ、生徒の学習意欲を向上させることができた。②生徒の学習能力の向上を形成的にとらえて評価することがより可能になった。この2点の検証ができたといえる。

《自己評価カードの記入例》

自己の学習を確認し、次の学習に向かっている意欲のある生徒の記載例

教師の「認め」や「支援」の言葉から学習の仕方を見つけることができはじめた生徒の記載例

今日、学習したこと

日付	学習内容	先生より
9/19	東京理工小平高等学校の外国語コースをパンフで見た。普通科よりも他国の言葉を学べる。	これは、情報処理の分野で、英語を学ぶのが、とてもいいですね。ぜひ、興味を持ってください。
9/26	御座工を調べました。部活動の文化系に、自主的な活動が盛んに行われていました。	工業科の特色は、部活動の文化系に、自主的な活動が盛んに行われていました。ぜひ、興味を持ってください。
10/2	教育課程を調べました。工業科の独特の授業を知りました。(工業)次は、まともな授業を……	ぜひ、興味を持ってください。説明会の参加もおすすめです。

今日、学習したこと

日付	学習内容	先生より
9/19	五箇年計画の特色、自主性、興味がある。	この分野は、とてもいいですね。ぜひ、興味を持ってください。
9/26	行事とか、部活動が、いろいろあった。でも、暑いのが、大変だった。	部活動の文化系、特色は、自主的な活動が盛んに行われていました。
10/2	暑さを感じ、それが、見ても、学校生活の部活動の楽しさ、教員との関係が、いいなって思った。	いろいろ発見がある分野ですね。ぜひ、興味を持ってください。説明会の参加もおすすめです。

検証授業2

研究例題「福祉ボランティア体験（老人ホームへの訪問）」で研究した方法を検証するため、「国際理解：海外修学旅行を企画しよう」の第7時「文化講座2・モンゴル」を検証授業として取り上げる。

(1) 指導案

ア 学年のテーマ 「国際理解：海外修学旅行を企画しよう」

イ 学習内容とねらい

- ①架空の海外修学旅行を企画する。その中で、世界の様々な文化に触れ、そのおもしろさ・素晴らしさに気づき、世界への視野を広げる。
- ②旅行の企画・校外への取材・まとめ・発表を通して、課題設定能力・課題解決能力・自己表現能力を育てる。

ウ 学習の流れ

時	生徒の学習活動	観点	学習活動に即した具体的な評価規準	評価方法
1	ガイダンス 文化講座1「ガーナ」	A	外国に興味を持てたか これからの見通しが持てたか	文化講座ワークシート1
2	グループ編成、どうやって調べ か話し合い活動計画を作成	A	調べ学習の方法が理解できたか グループの役割分担ができたか	活動計画書
3	その国について調べる	B	各種の調べ方ができたか	情報整理カード
4	取材先を決め、アポイントを取る	B	取材先を探し、アポイントが取れたか	アポイントカード
5	取材内容を決め、取材先に送る	B	取材内容を考え質問にまとめられたか	取材準備カード
6	発表の方法を考える	A	分かったことをまとめて発表の構想が 立てられたか	発表企画カード
7	文化講座2「モンゴル」	B D	発表の参考にできたか 外国への興味が増したか	文化講座ワークシート2
8	取材の準備、行き方などの確認	B	取材に行く準備ができたか	取材カード
9	校外学習（校外での取材）	B	マナーを守って取材ができたか	取材カード
10	まとめ・お礼状の作成	B C	発表の内容を決められたか お礼状が書けたか	お礼状 取材報告カード
11	まとめ・発表用補助資料（パンフ ・ポスター）の作成	C	工夫して、表現したいことが表現でき たか	補助資料 発表台本
12	まとめ・発表会リハーサル	C	聞く側に立った発表になっているか	リハーサル指導 発表台本
13	「予選コンペ」教室ごとにプレゼ ンテーション	C D	熱意のある発表になったか 聞く側は適切に評価できているか	発表 他者評価カード
14	「決勝コンペ」学年で発表	C D	質の高い発表になったか 聞く側は発表から学べたか	発表 他者評価カード

*授業観察・自己評価カードの使用は全ての時間で行った

エ 検証授業のねらい

本時では、取材とまとめに先立って、生徒がモンゴル人によるモンゴル文化のプレゼンテーション（副題「モンゴル修学旅行ではこんな体験ができる！」）を受けた。

目的は、①外国への興味関心を高める ②外国人とふれあう経験を積む ③これを参考に自分達の発表よりよいものにする ④本校の生徒会が長年取り組んでいる「モンゴルストリートチルドレン支援活動」について認識を深める、の4つである。

オ 本時の授業 対象：第1学年（男子47名、女子52名）

流れ	生徒の学習活動	観点	生徒の学習活動に即した具体的な評価規準	認めと支援の手立て	評価方法
導入	開会 生徒司会の言葉	A	・本時の課題を把握したか	・司会が本時の目的と課題を説明する	授業観察
展開	プレゼンテーションを受ける ①モンゴルの自然 スライドとビデオ・説明 ②モンゴル相撲 力士による説明と試技 生徒との対戦 生徒同士の対戦 ③モンゴルの馬頭琴と歌 馬頭琴の演奏 馬頭琴と歌の演奏 ④モンゴルの子供の生活 スライドと説明 ⑤質疑応答 閉会 司会の言葉	B	・モンゴルの自然や文化に興味を持ったか ・日本との違いに気付いたか ・スポーツ・音楽など文化は様々な分野があることに気付いたか ・実演・スライドやビデオなどの表現方法の持つ特色と効果を認識できたか ・モンゴルの子供達の現状について認識できたか	・生徒の挑戦者を募る ・質問を募る	授業観察
まとめ	文化講座ワークシート2の記入	C D	・自分なりの言葉で感じたことを表現できたか ・自分達の発表の参考にすることができたか	・書き方のアドバイス	文化講座ワークシート2

(2) 検証授業2を終えて

今回の学習では、活動の目的や評価規準を明確にし、目的を実現するのに適したワークシートを作成した。また、そのワークシートを資料として生徒を評価・支援することを心掛けた。検証授業までの時間で、生徒は毎時間ワークシートを使って課題に取り組み、自己評価カードを用いて自己評価し、教師は自己評価カードとワークシートの点検と書き込みを通して支援するという流れをある程度作ることができた。本時は学習の流れの中間点に当たるが、これまでの取り組みの流れから判断すると生徒が戸惑いを感じてもおかしくない内容であった。しかし、文化講座ワークシートを見ると、多くの生徒が「私達も言葉だけではなく実際に体験できる発表をやりようと思った」、「イタリアの楽器やあいさつ、早口言葉なども紹介しようと思いました」などと書いている。このことから、生徒たちは目的を理解し、自分の発表をよりよいものにしていこうとする意欲がより一層高まったことが確認できた。活動の目的や評価規準を明確にし、目的を実現するのに適したワークシートを作成して、生徒を評価・支援することは生徒の意欲を引き出し、力を伸ばすのに有効であると考えられる。

3 資料の説明

「総合的な学習の時間」の評価では、結果だけを評価するのではなく、学習の過程も含めて評価することが大切である。そこで、生徒の学習活動に合った評価資料を工夫し、生徒の活動をより具体的に評価できるようにした。評価資料には、生徒が自己評価をする欄と、教員や他者からの評価を記入する欄を特に取り入れた。

A 課題設定能力

「福祉ボランティア体験（老人ホームの訪問）」

— 資料の活用手順 —

情報整理カード・自己評価カード

↓ インターネット・市役所の老人福祉課
書籍・リーフレットなどの活用

討論記録・課題記入用紙・自己評価カード

↓ 目的的理解・自分のテーマ

アポイントカード・自己評価カード

↓ 相手の立場を考えたやりとり
訪問の趣旨の的確な伝達

事前相談カード・情報整理カード 自己評価カード

↓ 受け入れ先の意向や配慮事項の理解

討論記録・班仕事分担カード・個人カード 自己評価カード

↓ 内容・方法の相談決定・課題に合った
役割分担・積極的な話し合い

体験記録・訪問先の評価・自己評価カード

↓ 社会性・積極性・その場に合った行動

体験記録のまとめ・自己評価カード

↓ 体験を生かしたまとめ
今後の課題・他への呼びかけ

他者評価カード（発表）・自己評価カード

↓ 効果的な発表の工夫・表現豊かな発表

課題レポート・自己評価カード

自分なりの気づきや成長

情報整理カード

氏名 姓 名

老人ホームはこうだよ！

名称 および 住所	
訪問機会 および頻度	
訪問年月日	
建物および 敷地面積	敷地面積 区・市町村
運営時間	月曜日～土曜日 日曜日・祝日等
利用の形態 および利用時間	方式
職員	会 内訳 (うちパート職員)
その他	

実地的な学習の時間

「老人ホームを訪問しよう」

さあ、いよいよ老人ホームに行ってみよう。あらかじめ具体的な考えをまとめておきましょう。受け入れ先の意向などをしっかり確認しておきましょう。

班のメンバー

	座 席
	年 席
	年 席
	年 席
	年 席

①訪問先について確認しよう

お年寄りの人数	
職員数や構成	
スタッフの人数	
注意事項(条件や時間)	

②どんなことができるか確認しよう

番号	できること	その効果
例	お年寄りの話し相手になる。	お年寄りの心を和ませることができたら。

*できそうな順に番号をつけよう。

発表者

V 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、過去2年間の指導と評価に関する一連の研究成果と課題を踏まえて、次のような視点で取り組んできた。

- ①「総合的な学習の時間」においては、育てたい生徒の力についての明確な目標設定が学校や学年ごとに必要であること（「生きる力の素地をはぐくむ」視点に立った観点の見直し）
- ②「生きる力」といった客観的にとらえ難い能力を評価し育成するためには、生徒の学習活動に即した具体的な評価規準が、教科指導以上に必要であること（評価規準の検討と設定）
- ③学習過程における生徒の変容を、何によって、どのようにとらえ、評価に結び付けていけばよいのか、具体的なモデルを示すこと（評価資料の作成とその有効性の検証）

上記の視点から、生徒の学習過程における様々な評価資料を基に、生徒の活動を意味あるものとして「認め」、学びを「支援」するきめ細かな指導と評価の一体化を図る授業の在り方を追究した。具体的には、福祉ボランティア体験「老人ホームへの訪問」を研究例題として生徒の変容を確認するための様々な評価資料のモデルを試作した。これらの評価資料を活用することが生徒の学習活動に即した具体的な評価規準を達成するのに有効であることを検証するために2回の検証授業を行った。

授業を行った2校では、それぞれの学年や生徒の実態に基づいた学習計画から、「上級学校を知ろう」と「海外修学旅行を企画しよう」というテーマで、上記の観点と学習活動に即した評価基準の作成、研究例題の方法を取り入れた各種評価資料の活用を試みた。その結果、A校（検証授業1）では、自己評価カードにおける意欲の高まりが見られ、B校（検証授業2）では、ワークシートの記載から自らの発表をより高めていこうとする前向きな姿勢が見られた。これらのことから、「生きる力の素地をはぐくむ」ための指導に有効であることが確かめられた。

2 今後の課題

「総合的な学習の時間」の取り組みにおいては、テーマや題材が先行し、評価の在り方が不明瞭である場合が少なくない。今後は、学習を通して生徒の変容を評価し、成果と課題を明らかにしていくことが大切である。また、指導と評価の一体化を図るには、学校や学年の目標を明確に定め、目標を達成するための観点や具体的な評価規準・評価方法を関連づけて設定することが一層必要である。

今回の研究では、毎時間の形成的な評価については、その有効性を生徒の態度や評価カード等の感想から具体的にとらえることができたが、通知表等への記載のための評価の総括的方法等が、今後の課題として残っている。

また、各学校における3年間を見通した観点の系統性や各学年での取り組みに対する観点の重点化等についても校内で考察し、具体的なモデルを設定することが重要な課題である。